

武蔵野日曜聖書講筵 降誕節

聖霊の力

——マタイ伝第3章1～17節——

1989年12月24日

小池辰雄

なんじら回帰せよ 黙って祈り入る 孤軍万軍 十字架の下で聖霊を受けよ 無条件の世界
聖書は驚嘆驚倒して読む本 キリストと直結 聖霊のバプテスマ 聖霊の火 空中を翔ぶ

【マタイ3】

1 その頃バプテスマのヨハネ来り、ユダヤの荒野にて教を宣べて言う、² 『なんじら悔改めよ、天国は近づきたり』³ これ預言者イザヤによりて、斯く云われし人なり。曰く 『荒野に呼わる者の声す「主の道を備え、その路すじを直くせよ」』⁴ このヨハネは駱駝の毛織衣をまとい、腰に皮の帯をしめ、蝗と野蜜とを食とせり、⁵ ここにエルサレム及びユダヤ全国またヨルダンの辺なる全地方の人々、ヨハネの許に出できたり、⁶ 罪を言い表し、ヨルダン川にてバプテスマを受けたり。⁷ ヨハネ、パリサイ人およびサドカイ人のバプテスマを受けんとて、多く来るを見て、彼らに言う 『蝮の裔よ、誰が汝らに來らんとする御怒を避くべき事を示したるぞ。⁸ さらば悔改に相応しき果を結べ。⁹ 汝ら「われらの父にアブラハムあり」と心のうちに言わんと思ふな。我なんじらに告ぐ、神は此らの石よりアブラハムの子らを起し得給うなり。¹⁰ 斧ははや樹の根に置かる。されば凡て善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらるべし。¹¹ 我は汝らの悔改のために、水にてバプテスマを施す。されど我より後にきたる者は、我よりも能力あり、我はその鞋をとるにも足らず、彼は聖霊と火にて汝らにバプテスマを施さん。¹² 手にては箕を持ちて禾場をきよめ、その麦は倉に納め、穀は消えぬ火にて焼きつくさん』¹³ ここにイエス、ヨハネにバプテスマを受けんとて、ガリラヤよりヨルダンに來り給う。¹⁴ ヨハネ之を止めんとし言う 『われは汝にバプテスマを受くべき者なるに、反つて我に來り給うか』¹⁵ イエス答えて言いたもう 『今は許せ、われら斯く正しき事をことごとく為遂ぐるは、当然なり』 ヨハネすなわち許せり。¹⁶ イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給いしとき、視よ、天ひらけ、神の御霊の、鳩のごとく降りて己が上にきたるを見給う。¹⁷ また天より声あり、曰く 『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり』』



●なんじら回帰せよ

「その頃バプテスマのヨハネ来り、ユダヤの荒野にて教を宣べて言う、²『なんじら悔改めよ、天国は近づきたり』洗礼のヨハネが荒野にやってきて言う、
「なんじら悔改めよ、天国は近づいた」

と。「悔改めよ」は

「回帰せよ、向き直れ」

ということでした。

「神・キリストの方へ向き直れ、自分を見るんじゃないぞ」

ということでした。「悔い改める」という言葉がどうも躓きになる。悔い改めて、その時に少し神妙になって、またおかしくなって、また悔い改めてと、自分をいつまで見ていてもどうにもならん。もういいですよ、自分なんか見なくて。

我々の自然的存在は、太陽を見ていればいい。太陽は日本の国旗（日の丸）だ。今度は、太陽を見るばかりでなくて、自分が国旗になるわけだ。太陽を包んでしまう。この旗は白地です。我々を白地になさったのが十字架なんだから。

「お前の罪は、過去・現在・未来の罪は、全部私が引き受けた。お前の自我（罪）はすつ飛んでいる」

と。自我はあいかわらず在りますよ、そんなものは気にするなと。

「そんな自我なんてものは、私がみんな十字架に付けたんだから、相対的な自我なんてものは気にするな。私をお前の中に入れろ」

と、これが聖霊の世界です。御霊なるキリストを、太陽を中に入れる。

「心に太陽を持って」

と言う。それは祈ることです。

●黙って祈り入る

「祈る」というのはお願いすることじゃない。祈り入るんです。自分全体をキリストの中に投げ入れることが祈りなんです。瞑想して自分をキリストの中に投げ入れてごらんなきい、キリストのふところの中に。神の懐の中にキリストはいらっしゃったから、我々はキリストのふところの中に入る。

「あいつがキリストの懐の中に入ると、私は入りようがない」

なんて。そうじゃないんだ。キリストの懐というのは、何人でも、一億人でも入れる。これが宗教の世界の神秘です。

どうして私はこう簡単になっちゃったかね。私は簡単になりすぎちゃって困っているんだ、本当に。寝るときに、床の上に坐って——床の中に入るのはなくて、キリストという床の中に入ってしまう——黙って祈り入るんだ。そうするともう全身が熱くなってくる。



風邪なんか、すつ飛んでいってしまふ。まあ、私は85歳になってこんなことを言っているんだからね、あなた方はまだ20代だろ、あなた方は20代でこの世界に入ってみろ。エライことになるから。それくらいの一人一人になつてください。

●孤軍万軍

私はキリスト教界で棄てられている。教会からも無教会からも。キリスト教の書籍のリストには私の本なんか一冊も入ってない。そのように認められない。『無の神学』なんてのはひとつも認められていない。棄てられ認められず。ところが、どっこい。キリストは、キリストの直弟子たちは、私を認めるどころではない、天から応援している。だから、私は孤軍万軍と言っている。ひとつも寂しくない。

そういう凄い世界を私は詩で表現します。私が地上を去ってから、何年かたつて初めて驚くかどうか知らんけれども。

キルケゴールの宗教哲学が認められたのだから、彼が亡くなつてから百年目だ。それから騒ぎでした。そんなもんです。けれども、神さまの方から、キリストの方から

「然り」

と言つてくざれば、この一言は、いかなる敵よりも強い。だから、

「私はキリストに圧倒されて生きている」

と言っている。

超一級の人物は、数えるくらいしかない。キリストの直弟子も、パウロ、ヨハネ、ペテロ、ヤコブ、マタイ、ルカ、マルコ。それだけしかない。それが新約聖書だ。あなた方お一人一人が比較を絶するような存在です。人間は一人一人がキリストに在つては比較を絶した一人一人なんです、この聖霊をいただければね。聖霊をいただかなかつたらダメだよ。キリストを、御霊のキリストをうちに宿さなかつたら。

●十字架の下で聖霊を受けよ

だから、洗礼のヨハネは凄いいよ。

7 ヨハネ、パリサイ人およびサドカイ人のバプテスマを受けんとて、多く来るを見て、彼らに言う「蝮の裔よ、誰が汝らに、来らんとする御怒を避くべき事を示したるぞ。」

「お前たちはマムシの末だ、とんでもないパリサイだ」

と。キリストがまだ十字架にかからない前に、洗礼のヨハネがこういうことを言っているんだからね。

「今にキリストを十字架に、お前たちはかけるぞ」

と言わんばかりに。この洗礼のヨハネというのは御霊の器だね。激しい言葉だ。



8 ささらば悔改くいあらために相応ふさわしき果みを結べ。

果を結べませんよ、これは。本当の意味で果を結ぶためには、キリストのところへ行つて十字架を受けとつて、そして聖霊を受けとらなければ。

1950年の秋に私はこの十字架の下で、ぶつ倒されてキリストから聖霊を受けた。それからかれこれ40年。N君が『エン・クリスト』誌41号の最初の頁に

「結局、先生の悲願聖願の焦点は『十字架の下で聖霊を受けよ！』であった」

と書いてくれた。その通りです、私は地上を去るまで聖霊を受けとる。このために

「十字架、十字架」

と言っている無教会から出されたんだ。彼らは聖霊を受けないから。

ところが、塚本虎二先生がああ10年間の病気になる前に私に言った。不思議だよ、あの時は。先生はまだその時は何ともなかったからね。3時間くらい、先生と一対一で楽しく語つた。その時に塚本先生が、

「手島君と君のが本当だよ。僕はまちがっていたよ。しっかりとやってくれ」

と言われた。これは今考えると遺言ですよ。無教会は本当は使徒的信仰ではなかったという事です。彼らは研究はよくやっています、聖書の翻訳もやっています、註解もやっています。しかし、「本もの」はなかなかその時には認められないし、なんのかんと言われる。いいですよ。

●無条件の世界

聖書は一番売れる本だ。ところが逆に、一番本当は読まれてない本です。

「天才は少ない。本当のクリスチャンはなお少ない」

とキルケゴールが言った。その通りです。あなた方はその少ない一人一人になってください。キリストは無条件の世界なんだから。条件をつけているから入れない。無条件なんだ。その無条件に、なかなかかなれない。自我があるから。だから、

「私は十字架でお前を無条件の人間にしたんだよ」

というのがキリストなんです。そうすると、

「なかなか私は無条件になれません」

なんて思う。それはなれっこない。私はキリストから賜たまわっているんだから。無の世界は賜たまわっている。無条件も賜たまわっている。全部、これは賜物たまものなんだ。恩寵おんちゆうなんだ。恵みなんだ。恵みはたった一つですよ、キリスト自身が恵みなんです、恵みそのものなんです。

●聖書は驚嘆驚倒して読む本

こういう私の告白を、叫びを身体からだで受けとってください。頭じゃないよ、耳でもない。ところが、目で読んだり、耳で聞いたりする。それではいつまでたつても始まらない。さ



すがは日蓮だ、

「法華経を身体で受けとれ」

と言った。棟方志功も『板極道』という本に書いているとおり、彼も身体で描きだした。そうしたら凄い絵になってきた。

何でも本ものは全部からだです、全存在なんです。霊と肉ではない。霊肉渾然たる世界なんです。キリストはそういう霊肉者だから、変貌の山で輝いてしまっただよな。まあ、大変なひとです。

あなた方、福音書を読んで、もうぶつ倒れないですか。

「聖書は驚嘆驚倒して読む本なり」

と、私は自分の聖書の扉に書いた。そういう全身的な感激をもつて読まないことには、光も力も生命も来ない。本当の世界というのはごまかしがきかんです。

今のキリスト教界は「蝮の裔」が、「パリサイ」がたくさんいる。キリストは、だから、

「我は平和をもたらさんがために来たのではない。剣を投ぜんがために来た」

(マタイ10・34)

と言われた。激しい言葉だ。聖霊の剣を投ぜんがために来た。それは本当の平安に入れるためだ。平和ではない、平安です。

●キリストと直結

9 汝ら「われらの父にアブラハムあり」と心のうちに言わんと思うな。我なんじらに告ぐ、神は此らの石よりアブラハムの子らを起し得給うなり。

「私たちの先祖にはアブラハムという素晴らしい信者がいたが、その伝統的な末だから私たちは大丈夫だなんて思ったら、とんでもないぞ」

と言っている。お前たちは肉的にはアブラハムの末かもしれないけれども、ダメだぞと。神さまとは、キリストとは直結なんだ。

「親が信仰があつたから私も自然に信仰がある」

なんて思うな、そんなことではないぞと。非連続の連続なんだから、一人一人が直結しなければどうにもならん。

「石ころからアブラハムの子らを起す」

とは激しい言葉です。キリストも言っているでしょ、

「御国の子らといつてお前たちは、みんな天国から追い出されてしまっぞ。嘆きはがみしてももう遅い。そこらの異邦人、いろいろな不幸な人、それをみんな

私は天国の中に入れてやる」

と。言い逆らいの徴のキリストはそういう人なんだ。初めっから十字架に架かるような人だ。そのかわり、ここに来たら、何がどうなつたつて、もの凄い天国をパラダイスを現しながら



ら歩くような人になるんです、一人一人が。そういう明暗のもの凄いドラマの中を歩く。聖書はドラマであるというのはそのうわけです。

私はもう自分の著作集第十巻『聖書は大ドラマである』は、そろそろ頁がバラバラになりそうだから、ちゃんと皮のケースの中に入れて読んでいます。そして、いろいろなことを中に書き入れる。何月何日に誰が生まれたとか死んだとか、君たちばかりではないよ、歴史的な人物も。それから、他の本を読んで、この句は大事な句だ、これは聖書のこの所と相通ずる。そうすると、また書き入れる。皆さん、どうぞ、本を本当に生かしてくださいよ、自分でもって生かす道をね。

●聖霊のパプテスマ

11 我は汝らの悔改のために、水にてバプテスマを施す。されど我より後にきたる者は、我よりも能力あり、我はその鞋をとるにも足らず、

「私は水でバプテスマを施すけれども、私の後からくる人は大変なひとだ。私はその鞋の紐をとるにも足らないんだ」

と。洗礼のヨハネはキリストのことをよく見ているね。だから、

「預言者の中で最後の偉いやつだ」

とキリストはヨハネのことを言った。

彼は聖霊と火にて汝らにバプテスマを施さん。

キリストはバプテスマを地上ではなさらなかったですよ。天界に行かれてからそれをなされた、ペンテコステで。

12 手にては箕を持ちて禾場をきよめ、その麦は倉に納め、殻は消えぬ火にて焼きつくさん」

これを受けとらない者はみんな集められて焼きつくされてしまう。

13 ここにイエス、ヨハネにバプテスマを受けんとて、ガリラヤよりヨルダンに來り給う。14 ヨハネ之を止めんとしう『われは汝にバプテスマを受くべき者なるに、反つて我に來り給うか』15 イエス答えて言いたもう『今は許せ、われら斯く正しき事をことごとく為遂ぐるは、当然なり』ヨハネすなわち許せり。

そして、キリストはやつて来て、そのヨハネに洗礼を受けている。けれども、キリストは洗礼を受ける必要はないんだ。我々のために、我々に代わつて、悔い改めの、立ち帰りの洗礼を受けたわけだ。水の中に入って、

16 イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給いしとき、視よ、天ひらけ、
神の御霊の、鴿のごとく降りて己が上にきたるを見給う。

ところがどっこい。キリストは水から上がつてくると、聖霊が鴿のごとく臨んで、



また天より声あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり』

「私はお前を愛するぞ、お前はうれしいぞ」
と。そう言われてくださいよ、皆さんも。心配いらんよ。キリストの前につ倒れてごらんさい。この声がかかるから、

「我汝を愛し、汝を悦ぶ」
と。降参してごらんさい、この言葉がかかるから。平伏しとは降参ということですよ。

「参りました!」
と、全存在でキリストの前に降参し平伏す。そして、贖いの十字架を受ける。パウロと同じに、

「我れキリストとともに十字架せられたり。もはや我生くるにあらず、キリス

トわが中に生きたもうなり」(ガラテヤ2・20)

という、この現実に入る。すると、キリストは

「我汝を悦ぶ」

と仰る。それから御名のゆえに――あなた方にはいただいているいろいろな才能がある――それが活用される。

「自分を何者とも思うなと先生は言うけれども、何も思わなくなったら、何もできなくなってしまうのではないか」

なんて。そうじゃないよ。そうしたら、いただいた才能や何かがどんどん活用されるんだから。自分のためではない。キリストのために、神さまのために、栄光が現れるために活用される。知情意、何でもござれ。一人一人はそれぞれの特徴がある。そういう角度から生徒を見た教育が本当の教育になる。いわゆる教育でどうにかなるようなものではない。

●聖霊の火

まあ、日本は一番混沌としているね。しつかりしないといかん。だから、あなた方はこの福音を受けとつたら、みんな使命がある。君たちが触れる方々にこの世界を示していかなければ。それを遠慮していたらダメだ。

「来たりて視よ、この本(聖書)を読め」

とすすめてやる。まだ、あなた方は遠慮深すぎる。

ミカ書4章5～7節に、

「^{すべて}一切の民はみな各々その神の名によりて歩む。

ちゃんとそれぞれの民族には神さまがあるようだが、

然れども我らはわれらの神エホバの名によりて永遠に歩まん。

私たちにとっては

「我らはキリストの名にありて永遠に歩まん」



です。キリストはもう民族性を突き抜けた全世界のひとだからね。

6 エホバ言いたもう、其日には我かの足萎たる者を集え、かの散らされし者および我が苦しめし者を集め、7 その足萎たる者をもて遺余民となし、遠く逐やられたりし者をもて強き民となさん。而してエホバ、シオンの山において今より永遠にこれが王とならん。」(ミカ4:5-7)

それから、ミカ書7章8節に、

「8 我が敵人よ我につききて喜ぶなかれ、我仆るれば興あがる。幽暗に居ればエホバ我の光となりたもう。」(ミカ7:8)

暗きにあつてもキリストを光としている。キリストという見えない光はもの凄い愛をもつた、力をもつた、我々を活かす光なんです。

人それぞれの調子というものがありませんから、それぞれの調子でやっていく。しかしながら、内側にはキリストの火が燃えていなくては。この点では一つでなくては。聖霊の火が燃えている、あなた方自身がキャンドルです。このローソクは消えない。永遠の炎、永遠の火である。うれしくないですか、こういうことを聞いて。

「私の中のキリストの火は消えませんよ。私自身がどうであろうと、そんなことは関係ないんだ」

と。キリストの消えない火をじつと見てみる。そうしたらば、グングンすすめる。この火が原動力なんだ。

●空中を翔ぶ

私は、しかし、もう地上を歩くのが面倒くさくなった。空中を翔ぶよ。来年は天馬空をゆくが如くに御霊の翼でもって進んでいく。聖翼に乗っかって飛んでいく。両手が聖翼になつてしまつて、スーッと飛んでいく。そういうバカな夢を見るんだよ、僕は本当に。こないだ、そのようにして空を走りながらあなた方を按手してやった夢を見た。この腕のまんなまで飛んでいるんだからね。いやあ、目が覚めて楽しかったね。

もう本当の意味で、相手がいない。天下無敵なんです。

「敵を愛せよ」

「はい、愛することができます」

と。全部それを担うことができます。私を何と取り扱おうと、

「ああ、お気の毒さま」

というわけだ。本当ですよ、これ、聖霊の世界は。女の方でもそういう世界に入れますから、大丈夫です。まあ、素晴らしい世界だね。

それでは祈りましょう

